



## マンガビジネスの成長

岡田, 美弥子

---

(Degree)

博士 (経営学)

(Date of Degree)

2000-09-30

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2176

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002176>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【31】

氏名・(本籍) 岡田 美弥子 (福岡県)

博士の専攻分野の名称 博士 (経営学)

学位記番号 博い第54号

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の日付 平成12年9月30日

【学位論文題目】

マンガビジネスの成長

審査委員

主査 教授 吉原 英樹

教授 吉田 順一 教授 加登 豊

## 論文内容の要旨

本論文は、コミックとアニメーション、キャラクター商品を中心にした日本のマンガビジネスを実証的に研究したもので、8つの章から構成される。

第1章では、問題意識と研究の目的および研究の方法を述べている。本研究の目的は、日本のマンガビジネスの成長要因を明らかにすることである。一般にソフト産業が弱い日本のなかで、なぜマンガビジネスは国際競争力をもっているか、これがこの研究の問題意識である。事例研究とアンケート調査を通じて、日本のマンガビジネスの実態を明らかにし、マンガビジネスの成長要因の分析をおこなっている。

第2章から第4章にかけては、マンガビジネスを構成するコミックとアニメーション、キャラクター商品事業の事例研究である。事例で取り上げた3つの企業（組織）、およびそれらの企業と関連している企業に所属する45名とマンガ家など6名の合計51名に、1人あたり平均2時間のインタビュー調査を実施している。

第2章では、ひとつの少年コミック雑誌の編集部を取り上げている。この編集部は、現在多くのコミック雑誌で採用されている編集スタイルを築いたところであり、日本のコミック雑誌の編集部のなかでとくに重要なところである。第3章では、国内最大手のアニメーション製作会社を、第4章ではキャラクター商品企業として玩具会社を取り上げている。

第5章では、日本のマンガビジネスの海外進出の現状を述べている。日本のマンガビジネスの影響を強く受けている韓国に焦点を当て、コミックとアニメーション、キャラクター商品の市場や事業の仕組みについて実態を明らかにしている。さらに、日本のマンガビジネスの海外進出を促進した海賊版の実態についても述べている。

第6章では、コミックとアニメーション、キャラクター商品事業を対象に、1999年9月から10月にかけて実施したアンケート調査の結果を示している。コミック事業は回答数43（回答率26.2%）、アニメーション事業は回答数7（回答率58.3%）、キャラクター商品事業は回答数22（回答率55.5%）である。アンケート調査では、第2章から第4章までの事例研究と、多くの点で同様の結果が得られている。

第7章では、以上の第2章から第6章までの事例研究とアンケート調査の結果をもとに、日本のマンガビジネスの成長要因を分析している。そして、日本のマンガビジネスが、マンガビジネスの核となるコミック事業における作品創造システムと、コミックとアニメー

ション、キャラクター商品の3つの事業間にシナジーを生み出す事業展開システムによって成長してきたことを明らかにしている。作品創造システムの機能は、一方で作品の公募や持ち込みによってマンガ家の人材の発掘をおこない、他方で市場の評価にもとづくマンガ家の競争をつくりだすことにより、日本のコミック市場の拡大あるいは作品の質的向上をもたらすことである。事業展開システムの機能は、コミック作品を軸にテレビアニメとキャラクター商品事業を同時に展開することによって、各事業のもつ強みと制約を補完しあい、結果的に事業シナジーを享受することである。

第8章では、第7章で述べたマンガビジネスの成長要因を簡潔に要約し、今後の研究課題を提示している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の意義と貢献として、つぎの3点をあげることができる。

第1は、新しい研究分野を開拓したことである。出版物のコミック、テレビや映画のアニメーション、キャラクター商品などからなるマンガビジネスは、日本が強い国際競争力をもつ数少ないソフト産業として国内だけでなく国際的にも注目されている。デジタル情報化時代のコンテンツ産業としても重要視されている。しかし、日本のマンガビジネスの経営学的な研究は、これまでまったくなされていなかった。本論文は、日本のマンガビジネスをはじめて経営学的に分析したものであり、パイオニア的研究といえる。

第2は、発見事実の重要性である。本論文は、日本のマンガビジネスの成長を主として事例研究の方法によって実証的に分析したものである。マンガビジネスの成長の理由は、第1に、コミック事業の作品創造システム、すなわち、編集者と読者によるマンガ家の発掘・育成・競争の仕組みである。第2の理由は、コミック、アニメーション、キャラクター商品という3種類の事業の事業展開システム、すなわち、コミックを出発点にしてそれぞれの事業がもつ強みと制約を相互に補完しあい、その相互補完関係がシナジー効果を発揮するようにして事業を展開する仕組みである。日本でなぜマンガビジネスが成長したかの理由として、コミック事業の作品創造システムとマンガビジネスの3つの事業の事業展開システムを明らかにしたことは、ひとつの学術的貢献といえる。

第3は、情報アクセスの制約を乗り越えて実証研究をしたことである。日本のマンガ産業の企業（あるいは企業の一部門）の多くは非上場の企業であり、業務についてかならずしもオープンでない。本論文の著者は、コミック雑誌の編集部、マンガ家、アニメーションの制作現場、キャラクターグッズ企業に出かけ、当事者に会い、インタビューを実施することに成功している。本論文はまさに労作といえる。

しかしながら、本論文にも問題がないわけではない。

第1に、分析の理論的なフレームワークがかならずしも十分でない。ソフト産業では国際競争力のない日本が、マンガビジネスではなぜ強い国際競争力があるかという問題意識に適した理論的なフレームワークがほしい。第2に、日本のマンガビジネスの国際競争力の強さを解明するためには、日本のマンガビジネスを分析するだけでは十分でなく、アメリカのマンガビジネスとの国際比較が必要である。本論文ではマンガビジネスの日米比

較はなされておらず、この点で本論文は課題を残しているといえる。第3に、アンケート調査の回答データの分析の多くが単純集計にとどまっている。もうすこし高度な手法を使った分析も試みてほしかった。

以上の問題点はあくまで望蜀の感を出ないものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成12年9月13日

審査委員 主査 教授 吉原英樹

教授 加登豊（

教授 吉田順一